

# 水稻新品種 「コシヒカリBL1号」

富田 桂<sup>1)</sup>, 堀内久満<sup>2)</sup>, 寺田和弘<sup>1)</sup>, 田野井 真<sup>1)</sup>, 小林麻子<sup>1)</sup>,  
田中 勲<sup>3)</sup>, 見延敏幸<sup>4)</sup>, 古田秀雄<sup>5)</sup>, 山本明志<sup>6)</sup>,  
鹿子嶋 力<sup>7)</sup>, 正木伸武<sup>7)</sup>, 南 忠員<sup>7)</sup>, 杉本明夫<sup>7)</sup>

## “Koshihikari BL1”, a New Rice Cultivar,

Katsura TOMITA<sup>1)</sup>, Hisamitsu HORIUCHI<sup>2)</sup>, Kazuhiro TERADA<sup>1)</sup>,  
Makoto TANOI<sup>1)</sup>, Asako KOBAYASHI<sup>1)</sup>, Isao TANAKA<sup>3)</sup>, Toshiyuki MINOBE<sup>4)</sup>,  
Hideo FURUTA<sup>5)</sup>, Akashi YAMAMOTO<sup>6)</sup>, Chikara KAGOSHIMA<sup>7)</sup>,  
Nobutake MASAKI<sup>7)</sup>, Tadakazu MINAMI<sup>7)</sup> and Akio SUGIMOTO<sup>7)</sup>

いもち病真性抵抗性遺伝子Pitaを有し、それ以外の形質は「コシヒカリ」と同等である同質遺伝子系統、越南IL6号を育成した。同系統は「東北IL6号」を一回親、「コシヒカリ」を反復親として戻し交配を行ない育成したもので、2004年9月30日に水稲農林403号に登録され、「コシヒカリBL1号」と命名された。

キーワード：水稲，同質遺伝子系統，いもち病，真性抵抗性，品種，コシヒカリBL1号

Key words: Rice, Isogenic line, Blast, True resistance, Cultivar, Koshihikari BL1

## 緒言

いもち病は水稲の最も重要な病害である。いもち病に対する抵抗性は一般に真性抵抗性と圃場抵抗性に大別される<sup>1)</sup>。

真性抵抗性は、いもち病菌レースに対して特異的に働き、そのほとんどが単一の主働遺伝子に支配されている<sup>2)</sup>。真性抵抗性は、病原性レースが存在しなければ、その効果は極めて高いため、1940年代頃から外国稲の持つ真性抵抗性遺伝子の利用が積極的に行われ、クサブエ、ユーカラ、シモキタ、フクニシキ、サトミノリ等の品種が相次いで育成された。しかし、これらの品種は導入後数年で病原性レースの発生により、全国各地で罹病化、激発が起こり大きな問題となった<sup>3)</sup>。

このことがきっかけとなり、いもち病抵抗性育種は単一の真性抵抗性遺伝子の効果だけに頼るのではなく、新たな対応を求められるようになった。その対応方法については清沢ら<sup>4)</sup>により以下の五つに整理されている。す

なわち、圃場抵抗性の利用、圃場抵抗性と真性抵抗性を組合せる方法、一つの品種の中に幾つかの真性抵抗性遺伝子を併せ持たせる方法、異なった真性抵抗性品種の交代栽培、異なった真性抵抗性品種の混合栽培である。

このうち については、真性抵抗性遺伝子の異なる既存の数品種を混合することは可能ではあるが、品種の均一性を重視する我が国では、受け入れられる可能性が極めて低い。そこで、ある品種にいもち病真性抵抗性遺伝子を導入し、それ以外はもとの品種と変わらない同質遺伝子系統の利用が考えられた。

これに日本で初めて取り組んだのが宮城県古川農業試験場である。同試験場ではササニシキの同質遺伝子系統の育成を1977年より開始し、1994年以降順次ササニシキBL1号から7号までを育成、農林登録した<sup>5)</sup>。この同質遺伝子系統は、「ささるまん」として普及に移され、1997年には最大普及面積5,453haを記録した<sup>6)</sup>。

これに続き新潟県では1986年より、富山県では1991年よりコシヒカリの同質遺伝子系統の育成を開始した。新潟県ではコシヒカリ新潟BL1号から8号を2000～2001年に育成し<sup>7)</sup>、現地試験を重ねて、2005年度より従来のコシヒカリに換え全県的に栽培を開始する計画である。富山県ではコシヒカリ富山BL1号から6号を2002年に育成し<sup>8)</sup>、2003年度は約430haが栽培されている。

しかし、同質遺伝子系統を効果的に利用するには、異なる真性抵抗性遺伝子を持ったより多くの同質遺伝子系

1) 福井県農業試験場 水稲育種部

2) 福井県農業試験場 場長

3) 福井県福井農林総合事務所

4) 福井県農畜産課

5) 福井県農業技術経営課

6) 福井県嶺南振興局 農業普及部

7) 退職

統があることが望ましい。

このため、国の指定試験事業のもと1995年より福井県農業試験場において「コシヒカリ」の同質遺伝子系統育成のため、いもち病真性抵抗性遺伝子を持つ数種の系統との交配を行ったが、新潟県、富山県の品種登録を受け同種の遺伝子を持つ系統は破棄された。残された系統の中から新潟県、富山県ではまだ利用されていない真性抵抗性遺伝子 *Pita* を利用した「コシヒカリ」の同質遺伝子系統越南IL6号を育成した。同系統は2004年9月に水稲農林403号に登録され、「コシヒカリBL1号」と命名された。

ここに本品種の育成経過および特性について報告する。

本品種の育成にあたり、特性検定試験でご協力を頂いた関係各位に対し感謝の意を表する。

## 育種目標及び育成経過

### 1. 育種目標

本品種は「コシヒカリ」へのいもち病真性抵抗性遺伝子 *Pita* の導入を目的として育成されたものである。「コシヒカリ」は良食味で市場評価が高く、1979年に日本晴の作付面積を上回り日本一の作付となった。2003年には43都府県54万haで栽培されている。しかし、「コシヒカリ」はいもち病抵抗性が弱いことから、防除が不可欠である。近年、食の安全性を求める消費者からの減農薬米に対する要望が強くなってきた。一方、生産者からは生

産コストの低減を目的とした減農薬対策が要望されるなど、農薬依存軽減の意識が高まってきている。

以上の状況から、いもち病の被害だけは受けずに、「コシヒカリ」と同等の品質・食味の米が生産できる品種を育成する意義があると考え、「コシヒカリ」にいもち病真性抵抗性を導入して、消費者・生産者双方の要望をかなえる目的で育成が開始された。

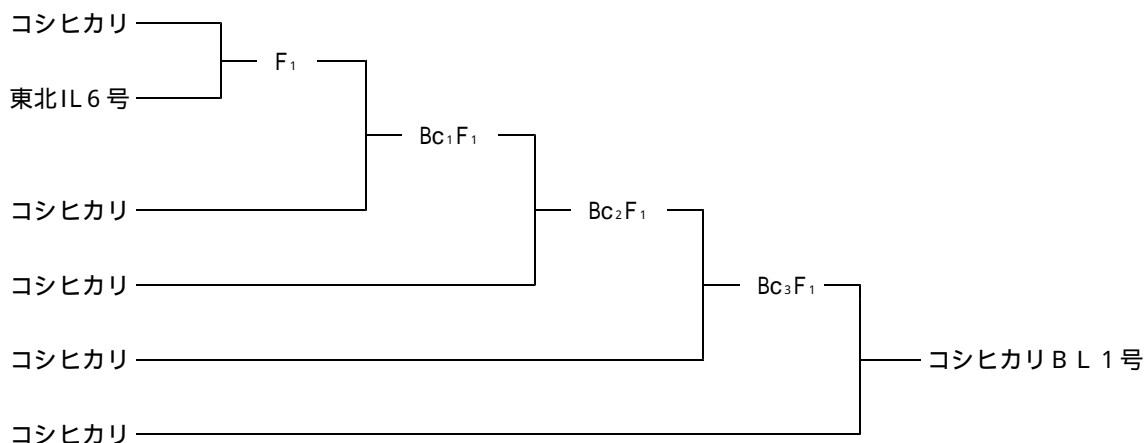
### 2. 育成経過

「コシヒカリBL1号」の系譜は第1図、育成系統図および選抜経過は第2図に示すとおりである。1995年の初回の交配では「コシヒカリ」を母親とし、父親にいもち病真性抵抗性遺伝子 *Pita* を持つ「東北IL6号」(後の「ササニシキBL6号」) を用いた。その後の戻し交配の過程では、「コシヒカリ」を父親側に、母親側にはいもち病菌レース003.0 (菌系名: Kyu89-246) に抵抗性の個体を選抜して交配親として使用した。2000年に圃場でBC<sub>4</sub>F<sub>1</sub>を、温室内でBC<sub>4</sub>F<sub>2</sub>を養成した。

その際に、いもち病菌 (003.0) を接種して選抜した。2001年から系統育成法によって、選抜固定を図った。

2003年に目標とした真性抵抗性遺伝子以外は「コシヒカリ」と差が認められなかった系統に、同質遺伝子系統「越南IL6号」の系統名を付し系統栽培を行うとともに、生産力検定試験に供した。

2004年、BC<sub>4</sub>F<sub>6</sub>世代で命名登録申請を行い「コシヒカリBL1号」と命名された。



第1図 「コシヒカリBL1号」の系譜

年次	1999	2000		2001	2002	2003
世代	*交配	Bc <sub>4</sub> F <sub>1</sub>	Bc <sub>4</sub> F <sub>2</sub>	Bc <sub>4</sub> F <sub>3</sub>	Bc <sub>4</sub> F <sub>4</sub>	Bc <sub>4</sub> F <sub>5</sub>
栽	系統群数				1	1
	系統数			3	5	5
植	個体数	25	50	**30	**55	**55
選	系統群数				1	1
	系統数			1	1	1
抜	個体数		12 3	5	5	5
育成系統図	コシヒカリ			6050	992	1793
	×	Bc <sub>4</sub> F <sub>1</sub>	個体選抜 (世促)	6051	993	1794
					994	1795
					995	1796
	東北IL6号/4*コシカ			6052	996	1797
備考					福系8569	コシカBL1号

注) \* は最終の交配

\*\* は 1 系統当たりの個体数

第 2 図 育成系統図および選抜経過

## ・特性の概要

### 1. 一般特性

葉身はやや直立し、草状は「コシヒカリ」に類似する。稈の太さは“中”、稈の剛柔は“やや柔”で、耐倒伏性は“弱”である。着粒密度は“やや密”である。極稀に短芒を生じ、ふ色、ふ先色とも“黄白”である。脱粒性は“難”である。

育成地における「コシヒカリBL1号」の出穂期および成熟期は「コシヒカリ」と同程度で、早晚性は“中生の早”に属する。稈長は“長”、穂長は“中”の中間型である。

以上の諸特性はいずれも「コシヒカリ」との差は認められない(第1, 2表)。

### 2. 収量性

2002年～2003年の生産力検定試験の結果、「コシヒカリBL1号」は「コシヒカリ」に比べ大きな差は見られず、収量性は「コシヒカリ」とほぼ同程度である(第2表)。

### 3. 玄米品質および形状

玄米千粒重は「コシヒカリ」と差がない。玄米は稀に

腹白を生じるが、光沢があり、外観品質は「コシヒカリ」と差がなく“上下”である(第3表)。

白米のアミロース含量およびタンパク質含量とも「コシヒカリ」と差が認められない(第4表)。

搗精歩合、搗精に要する時間および胚芽残存率は「コシヒカリ」とほぼ同程度である(第5表)。

玄米の形状は“中”、粒大は“中”でコシヒカリと同じである(第6, 7表)。

### 4. 食味

「コシヒカリ」を標準として食味官能試験を行った。その結果いずれの項目も「コシヒカリ」と有意差はなく、「コシヒカリ」と同等の食味を有すると評価された(第8表)。

### 5. 耐病性

#### 1) いもち病抵抗性

レースの異なる5菌系のいもち病菌株の孢子懸濁液を噴霧接種し、その反応から真性抵抗性遺伝子の推定を行った。その結果と導入親の系譜から、いもち病真性抵抗性遺伝子“Pita”を持つと推定される(第9表)。

葉いもち圃場抵抗性は育成地の畑晩播試験の結果では

同じPitaの遺伝子を持つ「ヤシロモチ」と同程度の発病であった。特性検定依頼先の愛知県農業総合試験場山間農業研究所では真性抵抗性のため判定不能であった。東北農業研究センターでは“中”と判定された。これらを総合して“やや弱”と評価した(第10, 11, 12表)。

穂いもち圃場抵抗性は愛知県農業総合試験場山間農業研究所の検定結果から真性抵抗性のため判定不能と評価された(第13表)。

## 2) 白葉枯病抵抗性

長野県南信農業試験場での検定結果から、白葉枯病に対しては「コシヒカリ」と同程度の“中”と評価された(第14表)。

## 3) 縞葉枯病抵抗性

愛知県農業総合試験場での検定結果から、縞葉枯病に対しては罹病性である(第15表)。

## 6. 耐冷性

育成地と福島県農業試験場冷害試験地の検定結果から、穂ばらみ期耐冷性は「コシヒカリ」並の“強”と評価された(第16, 17表)。

## 7. 穂発芽性

育成地での検定結果から、穂発芽性は「コシヒカリ」並の“難”と評価された(第18表)。

種苗法で定められた稲種苗特性分類一覧を第19表に、同法の指定種苗品種特徴表示基準に基づく品種特性表示を第20表に示した。また、草姿、玄米・籾の写真をそれぞれ写真1, 2に示した。

## . 育成従事者

本品種の育成に従事した研究職員は第3図のとおりである。

## . 引用文献

- 1)山崎義人,高坂淳爾 編著(1980) イネのいもち病と抵抗性育種. p175 - 186
- 2)清沢茂久,相原次郎,井上正勝,松本範裕(1979) イネ品種のいもち病抵抗性に関する分類 第1報 育雑 29. p77-83
- 3)岩野正敬(1987) 稲作における新品種導入・普及と病原菌レースの変動 農林水産技術研究ジャーナル 10(6). p23-27
- 4)清沢茂久,櫛淵欽也,渡辺信二(1975) いもち病抵抗性育種および育種研究の現状と問題点〔2〕 農業および園芸 第50巻第2号. p18 - 22
- 5)佐々木武彦,阿部眞三,松永和久,岡本栄治,永野邦明,丹野耕一,千葉芳則,狩野 篤,植松克彦,滝沢浩幸,早坂浩志,涌井 茂,黒田倫子,薄木茂樹,千葉文弥,宮野法近,佐々木都彦,遠藤貴司(2002) ササニシキ多系品種「ササニシキBL」について 宮城県古川農業試験場研究報告第三号. p1 - 35
- 6)食糧庁計画流通部計画課(1997) 平成9年度産米穀の品種別作付状況. p25
- 7)重山博信,松井崇晃,小林和幸,石崎和彦,阿部聖一,星豊一(2001) イネいもち病抵抗性同質遺伝子系統「コシヒカリ新潟BL」の育成 育種学研究第3巻別冊2号. 406
- 8)小島洋一郎,蛭谷武志,金田 宏,土肥正幸,石橋岳彦,木谷吉則,向野尚幸,山口琢也,表野元保,山本良孝(2003) 水稻新品種「コシヒカリ富山BL」の育成と活用 富山県農業技術センター研究報告 第20号. p13 - 31

第1表 生育観察結果

品種名	早 晩 性	稈		芒		ふ先色	ふ色	粒着 密度	脱粒 性の 難易	止葉 立性
		細	太 剛 柔	多少	長短					
コシヒカリBL1号	中生の早	中	やや柔	稀	短	黄白	黄白	やや密	難	中
コシヒカリ	中生の早	中	やや柔	稀	短	黄白	黄白	やや密	難	中

注) 2002年～2003年の平均値

第2表 出穂期，成熟期および生育特性，収量調査結果

品種名	出穂期	成熟期	結実	稈長	穂長	穂数	倒伏	いもち		全重	精玄米重	標準比
	(月日)	(月日)	日数	(cm)	(cm)	(本/m <sup>2</sup> )	程度	葉	穂			
	(月日)	(月日)	(日)	(cm)	(cm)	(本/m <sup>2</sup> )	(0-5)	(0-5)	(0-5)	(kg/a)	(kg/a)	(%)
コシヒカリ	8. 2	9. 8	37	92	19.0	426	5.0	0.2	0.3	146	55.7	98
コシヒカリ	8. 1	9. 8	38	91	19.2	444	5.0	1.0	1.9	151	57.1	100

注) 1.倒伏程度、葉いもち、穂いもちは0(無)~5(甚)の6段階  
2.2002年~2003年の平均値

第3表 品質調査結果

品種名	玄			米			品質
	1%重	千粒重	光沢	腹白	心白	乳白	
	(g)	(g)	(3~7)	(0~5)	(0~5)	(0~5)	(1~9)
コシヒカリ	811	20.9	5.8	0.8	0.5	0.0	上下
コシヒカリ	815	20.8	5.8	1.0	0.5	0.0	上下

注) 1.玄米の光沢は3(小)~7(大)  
2.腹白、心白、乳白の多少は0(無)~5(甚)  
3.玄米品質は1(上上)~9(下下)の9段階  
4.2002年~2003年の平均値

第4表 白米の成分分析結果

品種名	アミロ - ス含量	タンパク質含量
	(%)	(%)
コシヒカリ	17.6	6.4
コシヒカリ	17.5	6.7

注) 2002年~2003年の平均値

第5表 搗精試験成績

品種名	玄米	搗精	搗精	胚芽
	水分	時間	歩合	残存
	(%)	(秒)	(%)	率(%)
コシヒカリ	14.1	60	89.8	0.3
コシヒカリ	14.1	65	89.7	0.2

注) 1.供試玄米は生産力検定試験産を用いた  
2.搗精には試験用搗精機 Kett TP-2型を使用し、試料は各100g供試した  
3.適搗精度の判定は白度40以上に搗精されたものとした  
4.胚芽の残存率は500粒調査した  
5.2002年~2003年の平均値

第6表 玄米の形状

品種名	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	長さ/幅	長さ×幅	粒形	粒大
コシヒカリBL1号	5.00	2.80	2.04	1.79	14.00	中	中
コシヒカリ	5.08	2.80	2.02	1.81	14.22	中	中

注) 2003年の調査結果

第7表 玄米の粒厚分布

品種名	重 量 (%)						
	2.2mm 以上	~2.1	~2.0	~1.9	~1.8	~1.8 未満	1.9mm 以上
コシヒカリBL1号	3.2	16.9	48.2	21.5	8.5	1.8	89.7
コシヒカリ	2.6	15.9	50.4	20.3	7.8	3.1	89.1

注) 2002年~2003年の平均値

第8表 食味官能試験結果

試験年月日	標準品種名	パネラー数	総合評価	外 観	香 り	うま味	粘 り	硬 さ
'02.11.11	コシヒカリ	24名	-0.13	0.46	0.08	-0.08	0.00	-0.17
'03.11.25	コシヒカリ	18名	0.22	0.11	0.11	0.22	-0.06	0.11
'04. 1.16	コシヒカリ	24名	-0.13	0.08	0.04	-0.13	-0.04	0.08

注) 1. '04.1.16の試験は福井県農試企画・経営部で行い、材料は奨励品種決定調査試験産を用いた。  
 2. +は標準品種に比べて、総合評価、外観、香りおよびうま味が良い、粘りが強い、硬さが硬いことを示し、-はその逆を示す。  
 3. 食品総合研究所(旧食糧研究所)の方法に準じて試験した。

第9表 いもち病菌系別抵抗性検定結果

品種名	2002					推定 遺伝 子型
	Mu-95 (001.2)	Kyu89-246 (003.0)	稲86-137 (007.0)	HF-94-28a (043.0)	GFOS8-1-1 (303)	
コシヒカリBL1号	R	R	R	R	S	<i>Pita</i>
ヤシロモチ	R	R	R	R	S	<i>Pita</i>
コシヒカリ	S	S	S	S	S	+

注) 検定結果はR:抵抗性, S:罹病性を示す

第10表 畑晩播法による葉いもち抵抗性検定試験成績

品種名	推定 遺伝 子型	2002			2003		
		発病程度(0~10)			発病程度(0~10)		
		7/15	7/22	7/29	7/ 9	7/16	7/22
ｺｼｶﾞBL 1号	<i>Pita</i>	1	2	2	0	0	0
ﾔｼﾛﾓﾁ	<i>Pita</i>	0	1	2	0	1	2
ｺｼﾋｶﾘ	+	2	5	5	2	4	8

注) 発病程度 0(無) ~ 5(中) ~ 9(甚), 10(全茎葉枯死) で判定

第11表 畑晩播法による葉いもち抵抗性検定試験成績

品種名	推定 遺伝 子型	(愛知県山間農業研究所)			判 定
		2003			
		発病程度(0~10)			
		7/29	7/31	8/2	
ｺｼｶﾞBL 1号	<i>Pita</i>	0.8	1.3	2.3	-
ｺｼﾋｶﾘ	+	7.2	8.2	9.3	弱
東北IL6号	<i>Pita,a</i>	0.5	0.8	1.0	-

注) 1.5月24日播種, 2区制, 自然発病

2. 真性抵抗性遺伝子 *Piz*, *Pita*, *Pita-2*, *Piz-t* を持つ品種は抵抗性の判定はできなかった

第12表 葉いもち耐病性検定試験成績

品種名	推定 遺伝 子型	(東北農業研究センター)				判 定
		2004				
		発病程度(0~1)				
		菌 系				
		777.3	777.1	577.1	平均	
ｺｼｶﾞBL 1号	<i>Pita</i>	0.63	0.50	0.83	0.65	中
ﾔｼﾛﾓﾁ	<i>Pita</i>	0.75	0.67	0.88	0.77	やや弱

注) 1. 評価は同センター 水田利用部 上席研究官による

2. 数字は発病度(D)で、 $D = (2Ns + Nm) / 2N$ で算出した。Ns: 発病程度3(病斑面積5%)以上の苗数  
Nm: 発病程度2(病斑面積2%)以下の苗数、Nは調査苗数

第13表 穂いもち抵抗性検定試験成績

品種名	推定 遺伝 子型	(愛知県山間農業研究所)		判 定
		2003		
		出穂期 (月日)	発病 程度	
コシヒカリBL1号	<i>Pita</i>	8.20	5.4	-
コシヒカリ	+	8.20	9.0	やや弱
東北IL6号	<i>Pita,a</i>	8.16	9.5	-

注) 1.6月8日移植, 2区制, 自然感染

2. 真性抵抗性遺伝子型 + , *Pia,Pii,Pik,Pik-m* 以外の品種は抵抗性の判定はできなかった

第14表 白葉枯病抵抗性検定試験成績

品種名	(長野県南信農業試験場)					判 定
	2003					
	出穂期 (月日)	病斑 面積指数 止葉 葉		発病 程度 止葉 葉		
コシヒカリBL1号	8.17	6.8	4.4	6.8	4.4	M
コシヒカリ	8.15	6.4	3.4	6.5	3.5	M
キヌヒカリ	8.16	7.6	4.6	7.6	4.8	MS
秋晴	8.26	7.7	8.8	9.9	7.8	S

注) 1. 出穂後40日に1区10個体について罹病最大の止葉および同一稈の第2葉の病斑面積の割合を観察

2. 検定結果はR:強, M:中, S:弱を示す

第15表 縮葉枯病耐病性検定試験成績

品種名	(愛知県農業総合試験場)	
	2003	
	発病率 (%)	検定 結果
コシヒカリBL1号	67	S
あさひの夢	0	R
日本晴	80	S

注) 1. 検定結果はR:抵抗性、S:罹病性を示す。



第16表 耐冷性検定試験成績

品種名	2002			2003			平均		
	出穂期 (月・日)	不稔歩合 (%)	判 定	出穂期 (月・日)	不稔歩合 (%)	判 定	出穂期 (月・日)	不稔歩合 (%)	判 定
コシヒカリ	7.31	28.3	r	8.22	32.0	r	8.11	30.2	r
コシヒカリ	7.31	34.9	r	8.26	25.0	r	8.13	30.0	r

注) 1. 恒温水槽で19.5 の低温処理

2. 検定結果はr: 強

第17表 耐冷性検定試験成績 (依頼先)

品種名	(福島県農業試験場冷害試験地)				判 定
	2003				
	出穂期(月日)		不稔歩合(%)		
標準区	冷水区	標準区	冷水区		
コシヒカリ	8.26	9.04	9.2	37.8	2
コシヒカリ	8.24	9.04	15.3	42.2	2
大 空	8.24	9.04	8.9	67.1	4
農林21号	8.24	9.03	12.4	82.2	5

注) 1. 7.23~8.16まで水温約18.2 掛け流し(夜間止水), 2区制

2. 2: 極強、3: 強、4: やや強、5: 中以下を示す。

第18表 穂発芽性検定試験

品種名	2002		2003		判 定
	発 芽 率 (%)		発 芽 率 (%)		
	7日目	10日目	7日目	10日目	
コシヒカリ	39.4	49.2	1.5	17.2	難
コシヒカリ	31.4	46.9	1.0	16.9	難

注) 出穂後35日目の穂を5穂採取し、流水に浸して検定した。

年次 世代 氏名	'95 交配	'96 F <sub>1</sub>	'97 BC <sub>1</sub> F <sub>1</sub>	'98 BC <sub>2</sub> F <sub>1</sub>	'99 BC <sub>3</sub> F <sub>1</sub>	'00 BC <sub>4</sub> F <sub>1</sub> BC <sub>4</sub> F <sub>2</sub>	'01 BC <sub>4</sub> F <sub>3</sub>	'02 BC <sub>4</sub> F <sub>4</sub>	'03 BC <sub>4</sub> F <sub>5</sub>	'04 BC <sub>4</sub> F <sub>6</sub>	備 考
富田 桂	—————										現在員
堀内久満	—————										(3月) 現農業試験場長
寺田和弘	—————										(6月) 現在員
田野井真	—————										(4月) 現在員
小林麻子	—————										(5月) 現在員
田中 勲	—————										(4月) (3月) 現福井農林総合事務所
見延敏幸	—————										(4月) (5月) 現嶺南振興局
古田秀雄	—————										(3月) 現農畜産課
山本明志	—————										(3月) 現農業技術経営課
鹿子嶋力	—————										(4月) (5月) 退職
正木伸武	—————										(3月) 退職
南 忠員	—————										(4月) - (3月) 退職
杉本明夫	—————										(4月) (3月) 退職

第3図 育成従事者氏名

第19表 稲種苗特性分類一覧

項目番号	形 質	コシヒカリBL1号		コシヒカリ	
		階級	区分	階級	区分
- 1	草 型	5	中間型	5	中間型
- 2 - 1	稈 長	7	長稈	7	長稈
- 2 - 2	稈の細太	5	中	5	中
- 2 - 3	稈の剛柔	6	やや柔	6	やや柔
- 3 - 2	止葉の直立程度	5	中	5	中
- 4 - 1	穂 長	5	中	5	中
- 4 - 2	穂 数	5	中	5	中
- 4 - 3	粒着密度	6	やや密	6	やや密
- 5 - 2	穎 色	1	黄白	1	黄白
- 5 - 3	ふ先色	1	黄白	1	黄白
- 6 - 1	芒の有無と多少	1	稀	1	稀
- 6 - 2	芒 長	3	短	3	短
- 6 - 3	芒 色	1	黄白	1	黄白
- 7	玄米の形	5	中	5	中
- 8	玄米の大小	5	中	5	中
- 9	玄米の色沢	5	中	5	中
- 10	玄米の粒重	5	中	5	中
- 11 - 1	玄米のみかけの品質	4	中上	4	中上
- 11 - 2	玄米の光沢	5	中	5	中
- 11 - 6	腹白の多少	4	やや少	4	やや少
- 11 - 8	食 味	2	上中	2	上中
- 1	水陸稲の別	2	水稻	2	水稻
- 2	うるち もちの別	2	粳	2	粳
- 3 - 1	出穂期	4	中生の早	4	中生の早
- 3 - 2	成熟期	4	中生の早	4	中生の早
- 4 - 3	障害型耐冷性	3	強	3	強
- 5	穂発芽性	3	難	3	難
- 6	耐倒伏性	8	極弱	8	極弱
- 7	脱粒性	3	難	3	難
- 9 - 1	いもち病推定遺伝子型	1-8	<i>Pita</i>	1-0	+
- 9 - 2	穂いもち圃場抵抗性	6	やや弱	6	やや弱
- 9 - 3	葉いもち圃場抵抗性	6	やや弱	7	弱
- 9 - 4	白葉枯病抵抗性品種群	0	金南風群	0	金南風群
- 9 - 5	白葉枯病圃場抵抗性	4	やや強	4	やや強
- 9 - 7	縞葉枯病抵抗性品種群	0	日本水稻型	0	日本水稻型
- 1 - 1	アミロ - ス含量	5	中	5	中
- 1 - 2	タンパク質含量	4	やや低	4	やや低

第20表 指定種苗品種特徴表示基準に基づく品種特性表示

品 種 名	栽培	早 稈	草 耐	い 倒	白 葉	縞 葉	玄米の		
(育成場所)	適地	晩 生	長 型	伏 性	ち 病	枯 病	見かけ	栽培上の注意	
		用途					の品質		
コシヒカリBL1号	北陸 食用 関東 以西	中 生 の 早	長 中 間	弱	や や や 弱	や や 強	罹 病 性	中上	いもち病以外の特性は 「コシヒカリ」と同じである。
(福井農試)									

# “Koshihikari BL1” , a New Rice Cultivar

Katsura TOMITA , Hisamitsu HORIUCHI , Kazuhiro TERADA ,  
Makoto TANOI , Asako KOBAYASHI , Isao TANAKA , Toshiyuki MINOBE ,  
Hideo FURUTA , Akashi YAMAMOTO , Chikara KAGOSHIMA ,  
Nobutake MASAKI , Tadakazu MINAMI and Akio SUGIMOTO

## Summary

“Koshihikari BL1” (*Oryza sativa* L.), an isogenic line of “Koshihikari” with the blast true resistance gene *Pita*, was developed under the National Crop Breeding Program at Fukui Agricultural Experiment Station in 2004. “Koshihikari BL1” was bred from a continuous backcross using “Touhoku IL6” as a non-recurrent parent and “Koshihikari” as a recurrent parent since 1999. A promising line named “Etsunan IL6” in the BC<sub>4</sub>F<sub>6</sub> generation was officially registered as Paddy Rice Norin 403 by the Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries (MAFF) and named “Koshihikari BL1” in 2004. The characteristics of “Koshihikari BL1” are the same as those of “Koshihikari” except the blast true resistance gene *Pita*.

This research is supported by MAFF



写真1 コシヒカリBL1号の草姿  
(右: コシヒカリBL1号、左: コシヒカリ)



写真2 コシヒカリBL1号の玄米(上)および籾(下)  
(左: コシヒカリBL1号、右: コシヒカリ)